

**山田** ではないですよ!やってみたいですけどね、竹刀とかもってバチーンと(笑)

**堤** いや、それぐらい徹底されているように思ったよ。

**山田** でも芝居って誰かの人生を切り取っているものなので、その役と近い経験や感情を演じる俳優さんに共有してもらわないとうまくできないこともあるんですよ。そこを一緒に探っていく作業などは丁寧に寄り添ってコミュニケーションをとっていました。

**堤** なるほどね、そこに没頭してしまうと演出家の負担も大きいし、演出家の人間性がないと難しいよね。僕も長年やっているプロってこういうものと決めてしまうことが多くなってきているのは事実。そういったシステムチックな作り方だと本当に人の感情を動かすことはできない、と思って自分でも小さな劇団を立ち上げたりしてるんだよね。

**堤** もともと演劇の人ではなかったんでしょ?

**山田** そうです、中高は演劇部だったんですけど。レコード会社の宣伝部にいました。ただ、年に何回か嫌になっちゃうんですよ。若かったし、無鉄砲に頑張りすぎていたので。それで、このままじゃだめだな、趣味を持つと思って、自主映画とかに参加し始めて。そのうちに高校の演劇部の同期とカフェで小さな公演を打って、初めて自分の脚本をほめられて…それがきっかけですね。

**堤** だから、なにかのゼミに入っていたわけでも協会に入っていたわけでもないんでしょ?それであそこまで精神をのぼりつめられるのはすごい。形だけのぼりつめられる、ラッキーな人はいるけれど、そうではない。3作品(「荒川、神キラーチューン」「夜、逃げる」(※2)「口々」(※3))を見させてもらってすべて言葉がしっかり固められているし、何より構成力に信頼が置ける。これって何十年もやらないと見えないポイントだったりするんだよね。しかもそれだけじゃなく、その上に浮かび上がってくる独自性がある。これはね私にはつくれないよ。もしも意図してないなら天才。××戯曲賞もとれますよ、予言する。

**山田** 本当ですか?賞取れたらお食事いきましょ(笑)

**堤** 「夜、逃げる」も見て同じ映画監督として職場を荒らさないでって思った。(笑)

**山田** でもあれ、すごいつらかったんですよ。技術スタッフさんに怒られまくりで、「申し訳ございませんでした」って謝ってばかりでした。演劇しか経験も知識もなかったんで…。

**堤** 技術スタッフさんに怒られるのは儀式だからね。俺もAD時代はすごい怒られたよ。でもね、演劇の人のスタイルとかこだわりって捨てられないものだからね。映画界では受け入れられないところもあるんだよ。でもそれは捨ててはいけないものだから。

**山田** 音楽も好きだし、映画も好きだし、演劇以外にもやってみたいという興味はあって。それで映画を去年撮ってみようと思って挑戦したんですよ。



もっと私はいい家に住みたいとか、僕は夢を追いかけているんだとか。どこか現状に満足してない部分もあったりするのかなって。

**堤** 本当にすごいものを見せてもらったなと思ったよ。描いている精神がヨーロッパの映画を見ているようだった。自主映画もいっぱい見ているけれど、そのレベルではなかったね。

**山田** それは技術スタッフがよかったからということでは…。

**堤** いやいやそれだけではないよ。脚本はもちろん、演じている内容から出てくるものだったり、映像の色味だったり、そういうものがすべて組み合わせさってうまく構築されていた。世の中の映画をヒットさせることに必死になっている世界に対するものすごいピストルの一発だと思ふよ。あの価値は来年再来年になっても古くなることはない、普遍的なものだからね。もっと世の中に知らせなければだめだと思った。

**山田** いやいや、本当にうれしいです。ありがとうございます。

**堤** 「口々」は本当に参りました。表現者として完成されていると思ったよ。あれが想像の産物だったら怖すぎる。近寄りたくない!

**山田** なんです!だから観終わった後に、「実体験なのか」と聞かれたんです。

**堤** そう、でも若干体験談だって聞いてちょっと安心した(笑)

**山田** 今回ユニットを立ち上げるにあたって、□字ックでやっている派手な演出や女性視点とは違ったことをやろうと思ったんですよ。そこで家族の物語で男性を主軸に描こうと思って。あと認知症を取り上げてみたかったです。自分が挑戦していないことをやってみたかった。

**堤** そうだったんだね、もう□字ックのスタイルは完成されているじゃない。女性を描くことに対しては右に出る人はいないと思うし。なのに、なぜそこにいくんだろうと不思議だったの。もうここまで来ると次はなにやるの?ミュージカル?

**山田** ミュージカルやりたいんですよ!

**堤** じゃあ帝劇かな?(爆笑)でもあくまでそこは山田さんのもっている表現でやってほしい。誰とも重なり合わない強さだから。それを実感できたのは「口々」だったな。若きレジェンドであってほしいね。

**山田** がんばります。「上野パンダ島ビキニーズ」(※4)も一緒にお仕事できて本当に光栄でした。堤さんに少し脚本を直してもらって、特に笑いの要素などを足してもらったら、格段に面白くなったので、僭越ながら相性がいいんだな、っておもいました。

**堤** 結婚する?(笑)

**山田** こらっ(笑)最終的に舞台は演出家が何を発信したいかという前提での脚本だから、うまくマッチしたようですごくうれしかったです。

**堤** いやいやあれだけ脚本の台詞がハネていて若い言語があふれていると、また親父ギャグが映えたりするんだよね。でもそれだけではない、荒唐無稽でもそれぞれの役の背景が出ていて、すごく期待できるなと思ったよ。

**山田** 次回、2018年1月に本多劇場に進出するんです。

**堤** 女芝居はたたきつけられたし、山田さんの内面は口々で見たし…次は何を書くの?

**山田** 団地とシェアハウスを舞台に描きます。このふたつって時代を象徴する、集合住宅だと思うんですよ。でも、もっと私はいい家に住みたいとか、僕は夢を追いかけているんだとか。どこか現状に満足して

ない部分もあったりするのかなって。

**堤** 何それ、全部宇宙じゃん。(笑)今、便利な時代になって考えることを放棄してしまう人間が多くなっている。その思考停止状態の社会に深く爆弾を投げ込む作品を期待しているし、撃ち殺してくれるのは山田さんだと思っているよ。

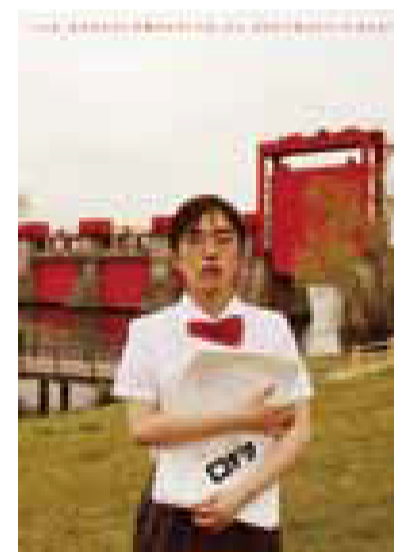
**山田** バンク精神で挑みます。乱射ですね!

**堤** こわいな…(笑)今後の活躍本当に楽しみにします。…しかしあれだね、ひとつ言えるのは2020年の東京オリンピックには我々は絡めないことは断言できるね。

**山田** くそー!からみたいなー!!

(2017年3月10日取材)

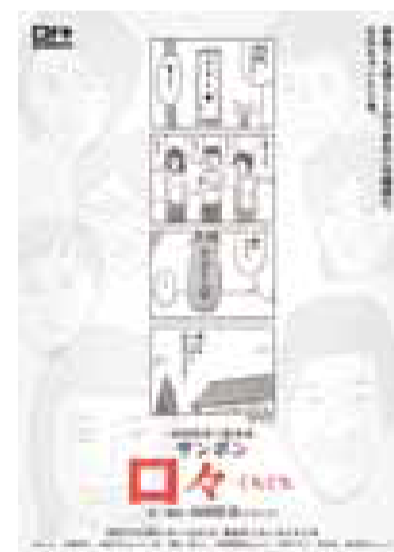
編集:宮原真理



(※1)

□字ック第十一回公演「荒川、神キラーチューン」

2016年6月上演 東京芸術劇場シアターウエスト他



(※2)

山田佳奈×松本亮ユニット サンボン いちほん目「口々」

2017年2月上演 サンモールスタジオ



(※3)

山田佳奈 初監督・脚本映画「夜、逃げる」

さぬき映画祭2017・ゆうばり国際ファンタスティック映画祭2017正式招待作品

(※4)

ネルケプランニング「上野パンダ島ビキニーズ」

演出:堤幸彦/脚本:山田佳奈

2017年3月上演 品川プリンスホテル クラブeX